# 海外日本語学校との交流をとおした継続的サービスラーニングの可能性
## －ネパールの日本語学校との国際交流活動についての考察－

# A Study of Continuous Service Learning with Overseas Language Schools
## -International Activities with Japanese Language Schools in Nepal-

澤崎 敏文[*1]，澤崎 幸江[*2]
SAWAZAKI Toshifumi[*1], SAWAZAKI Yukie[*2]
[*1] 仁愛女子短期大学
[*1]jin-ai Women's College
[*2] 株式会社ふくいコミュニケーションズ
[*2]Fukui Communications Inc.
Email: sawazaki@jin-ai.ac.jp

**あらまし**：これまで，学生がリアリティを持って学習できる環境構築のため，地域と連携した PBL 型の演習授業を実践してきた．特に，2017，2018 年にはネパール山岳地域の小学校でのボランティア活動，2022 年には，同ネパール支援者とのオンライン交流活動など，様々な機会を捉えて継続的な海外 PBL のあり方について考察をおこなってきた．今回は，ポストコロナ時代における今後の新しい国際交流・PBL 活動等のあり方について，2024 年 2 月の現地調査を踏まえた考察と展望である．
**キーワード**：アクティブラーニング，PBL，サービスラーニング，海外連携，遠隔教育

## 1. はじめに

本学では，これまでも学生がリアリティを持って学習できるような PBL 型授業の実践に取り組んでおり，福井県内企業を中心に，様々な機会を捉えて地域連携型の PBL を実践してきた．また，近年は海外活動に興味を示す学生も多く，台湾やネパールといった地域での海外活動も 2016 年度から継続的に実施してきた．例えば，2017 年 2 月，2018 年 2 月には，サービスラーニングの一環として，ネパール山岳地域ラムチェ村の小学校にて学生企画による教育ボランティアを実践し，海外 PBL としてのサービスラーニングのあり方についての検討をおこなってきたところである(1)．また，2019 年 9 月には，これまでの活動や学生の意見・動向を反映し，海外 PBL を正課の授業とするための実証実験を現地企業の協力も得て台湾にて実施した(2)．その後，2023 年から本学の国際理解という正課の授業となった．

このような海外活動を伴う PBL は，学生の評価や満足度も高く，達成感が感じられる一方で，先のコロナ禍のようなパンデミックにより一時中断を余儀なくされたり，オンラインでの実施へと切り替えたりするなど，これまで以上に継続性に関する課題が多いことも明らかになった．そのため，2021 年，2022 年には，オンラインによる海外 PBL 活動をおこない，それら課題等についても対面実施との比較検討をおこなってきたところである(3)．

今回は，2024 年 2 月のネパール現地訪問調査を踏まえて，これまでの海外 PBL を継続的な活動とするため，また，ポストコロナ時代における今後の新しい国際交流・PBL 活動等のあり方について検討するため，実施のための諸条件・環境整備やこれら活動をサービスラーニングとして継続かつ制度化できる可能性についての考察と展望である．

## 2. ネパールの日本語学校等訪問

これまでの実践を踏まえて，今後，継続的に国際交流活動や海外サービスラーニングをおこなう上での課題や授業設計の参考とするため，以前から交流のあったネパールのボランティア拠点ならびに同国バネパ・カトマンズ両市にある日本語学校への訪問調査を 2024 年 2 月におこなった．

今回の訪問調査の対象は，これまでの支援活動で中心的な役割を担ってきた Mina Lama 氏ならびにその家族が運営する日本語学校 Hachiko Japanese Language School and Culture Center（バネパ校，カトマンズ校），地震等で被災した女性の就労支援施設（フェルト細工工場），そして，学生の宿泊施設となる予定の銀杏旅館の現状である．

### 2.1 日本語学校

これまでの活動は山岳地帯の小学校での語学教育支援（語学教育交流や教材提供）が中心であったが，最新の現地ニーズ，首都カトマンズからのアクセスの容易さ，学生が現地滞在する場合の宿泊施設の整備状況等を考慮し，今回は，カトマンズから東に車で 1 時間ほどに位置する都市バネパの日本語学校を訪問調査した．この学校は 2019 年に開校した比較的新しい語学学校であるが，常時 100 人以上の日本語学習者が在籍し，将来的に日本への留学・技能実習等を目的とする学生が多く集まっている．以前の交流活動でも中心的な役割を担ってきた Lama 氏の家族が運営を行っており，習熟度別にクラス編成されている比較的大規模な学校である．

学校にはインターネット環境も整備されているた

め，オンラインによる学生同士の交流も可能であること，就労しながら通う学生も多く，授業が早朝から始まるため，日本との時差なども問題が少ないこと等を話し合うことができた．ただし，教室内にはPC 等の設備はない．一方，現地学生の大多数はスマートフォンを所持しており，かつ，ネパールでは多くの飲食店等が無料の Wi-Fi サービスを提供していることから，日本人学生が作成した教材をオンライン等遠隔で提供できる可能性もあることがわかった．

図 1 バネパの日本語学校

### 2.2 就労支援施設（フェルト細工工場）

この施設は，震災等で家族を亡くした女性の就労支援施設として，語学学校と同様に，Lama 氏が設立したもので，過去にもフェアトレードの一環として本学学生が製品購入・販売に協力してきた施設である．今回は実際にその製品の作成現場を見学させていただき，日本の学生参加の可能性についても直接伺うことができた．

図 2 就労支援施設の作業風景

### 2.3 銀杏旅館（宿泊施設）の現状

過去の訪問時も学生が利用した宿泊施設であり，上記２施設からも近接．コロナ禍を経て運営形態が一時変化したが，基本的には学生が現地訪問するケースでの宿泊拠点として機能することを確認できた．

## 3. 学生の活動環境等の考察

以前からも，海外サービスラーニングの環境設計等においては，ジョージア大学の調査報告書「A Survey of Best Practices of Global Service-Learning Programs in UGA(2009)」の「海外でサービスラーニングを実施するにあたって重要となる要素」を参考に[(4)]，学生が自主的に活動できるような環境を考慮してきた．特に，これまでの経験から，以下の 5 点を我々独自のチェックリストとして掲げている．

①現地のニーズ等の把握
②現地と密に連携が取れる体制があるか
③参加学生がどの程度関わることができるか
④参加学生の知識・学びがそこで応用できるか
⑤継続的に実施できる体制となっているか

特に，コロナ禍を経て，双方のオンライン環境への対応が進んだことから，継続性という点においても，日本人学生の現地訪問に加えて，オンラインでの交流活動を行うことは効果的である．既にインターネット環境が整っている状況を考慮するならば，前述の日本語学校訪問で話し合ったように，リアルタイムでの授業参加，オンデマンド型動画等の教材作成・提供，語学交流以外の文化的交流活動などが考えられる．一方，既にインターネット上にも様々な無償の日本語教材が存在しており，独自に日本語教材を作成することの意義についても事前に考えておく必要がある．また，制作・選択する日本語教材の適切さなども考慮する必要があり，この場合，事前・事後に大学の日本語教育者等専門家による監修が必要であると考える．今後は，さらに現地の日本語学校のニーズや教育設備等の環境を詳細に調査して，前述のチェックリストに対応できるような環境整備を整えていく予定である．

## 4. 今後の展望

今回の日本語学校等の訪問調査は，ネパールにおける日本語教育の現状，コロナ禍後の街の状況を理解し，海外サービスラーニングのフィールドとしての可能性を検討するための参考となった．また，このような海外サービスラーニングを PBL 型授業として設計する際の 3 つの課題についても，引き続き検討していきたいと考えている．

- ✓ 学生の自主的・主体的な意思により実施されるための環境整備
- ✓ 活動をサービスラーニングとして評価するための標準的な指標や基準の確立
- ✓ 活動が継続的となるような仕組みづくり

### 参考文献

(1) 澤崎敏文: “ネパールでの支援活動実践と PBL としてのサービスラーニングの可能性”, 仁愛女子短期大学研究紀要, 第 50 巻, pp.21-27 (2018)
(2) 澤崎敏文, 野本尚美: “海外での企業連携による PBL 型授業設計と実践に関する考察”, 仁愛女子短期大学研究紀要, 第 53 巻, pp.13-18 (2021)
(3) 澤崎敏文, 野本尚美: “オンラインと対面を組み合わせた国際理解教育に関する 授業実践と考察”, 仁愛女子短期大学研究紀要, 第 55 巻, pp.1-7 (2023)
(4) Deborah Gonzalez, A Survey of Best Practices of Global Service-Learning Programs in UGA, Office of Service-Learning, University of Georgia, pp10-11 (2009)